

浄土

昭和十年五月廿日 第三種郵便物認可（毎月一回一日発行）
昭和二十四年四月二十八日 郵政省特別致謝状授与第三五二号
昭和三十三年十一月二十五日印刷 昭和三十三年十二月一日發行

第二十四卷

第十三号

十二月号



◇◇信仰の歩みを進めるために◇◇

新刊

浄土トラクト

大正大学教授 佐藤賢順著

信仰へのみちびき

B六版・十六頁
定価十五円十八円

目次

1. 大慈悲の仏智
2. 知性を超えて
3. 美的情感を超えて
4. 本願の不思議にて
5. すべてを包む愛
6. 人生は信ずる心から
7. お導びきのままに

大正大学教授 竹中信常著

仏教入門

B六版・三十一頁
定価二十円十八円

目次

1. 馬に水を飲ませるもの
2. 流れゆくもの
3. なやまとまよいのもと
4. すでに救われている
5. 信ずるところ
6. 仏を思う
7. 新しい生活
8. 美わしき世界の建設

東京都品川区上大崎一の七八二

法然上人鑽仰会

振替 東京八二一八七番

浄土十二月号 目次

表紙・扉絵

結城天童

カット

加藤金一

意訳 仏身観文……………(2)

成道会……………佐藤良智……………(4)

垣を越える……………西川知雄……………(8)

鐘談義……………養田実……………(12)

調査進む徳川家の墓所……………杉本信雄……………(14)

金光房と阿波之助……………中川大仙……………(26)

高僧伝 大野法音……………大橋俊雄……………(18)

播摩路に宝津を訪れて……………戸川靈俊……………(22)

念仏の声するところ邪法さかえず……………仁広……………(7)

毛筆の手紙……………安藤正雄……………(20)

川上に流れる……………N・T……………(27)

浄土歌壇……………岩野喜久代……………(29)

法然上人の言葉(六)……………増谷文雄……………(30)

扉の御法語……………(36) 仏教ものしり帖……………(28)

書評「危機と信仰」……………(36) 新規会員紹介……………(41)

大仏様は何時たつた……………(20) 支部通信……………(41)

法然上人をめぐる人々(完)……………井川定慶……………(38)

浄土

十二月号

淨摩尼珠という珠を、に
れる水に投れば、珠の用力に
てその水きよくなるがごとし。
衆生の心はつねに名利にそみ
て、にこれる事、かの水のご
とくなれども、念仏の摩尼珠
を投れば、心の水おのづから
きよくなりて、往生をうる事
は、念仏のちから也。

法然上人御法語



意 訳 仏 身 観 文

吉 田 定 久 訳

1 釈迦は阿難と

韋提華に、

告げて阿弥陀を

観^{かん}わしむ、

阿難まさに

かくぞ知れ、

阿弥陀ほとけの

御^み肌えは

紫金^{しこん}の色も

さながらに、

仏^{ぶつ}身は高し

億由旬。

2 眉の間の

白毫や、

目は美しく

晴澄みて、

おん身に出づる

光明も、

つむりの光も

極みなく、

光の中に

みほとけや

仕^{つか}うる菩薩は

充ち満^みてり。

3 あな畏しや

阿弥陀仏、

喩えがたなき

八万の、

光明一一

障りなく、

世界を照して

遍^{へん}きも、

御^み名を称うる

人々を

救え取らんと

いと強し。

4 粧えつぶさに

説き得ぬも、

心の眼を

開き見よ、

若し此事を

見る者は、

あまた仏も

仰ぎ見ん、

仏を見

奉るゆえ、

念仏三昧

なりという。

5

かく観いなば

一切の、

仏のすがたも

見るぞかし、

ほとけの姿

見るにより、

仏のこゝろも

また感ず、

心はめぐみに

充み溢れ、

世のもろ人を

救うなり。

6

かゝる観いの

強き者、

此身をこゝに

捨て果てゝ、

仏の御前に

生れ往き、

こよなき覺り

開くを得、

是の故智えの

さとき者、

唯よく心を

弥陀に係け。

7

眉間に眼まなこ

そゝがなか、

尊きすがた

現わさる、

阿弥陀ほとけを

仰ぐ時、

即ち十方の

御仏は、

ひとしく行者を

はげまさん、

必ず西に

生るぞと。

8

これは偏ひとへいに

弥陀仏を、

仰ぐ第九の

観かんいにて、

正しき観いの

この他は、

みな邪よこしましまの

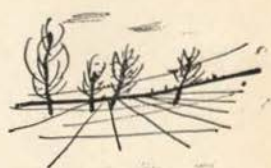
観かんい故、

心静かに

ひたむきに、

阿弥陀ほとけを

観かんうべし。



成じよう道どう会え

佐藤良智

十二月八日は釈尊が、凡平な一人の人間から、悟りを開いて仏となられた、尊い日であります。ほ、だい、樹、という樹の下で四十九日の間も修行されて、その結果、八日の晩に、夫の一角に輝く星をみつめ、豁然として悟りを開かれたと伝えられています。このことから八日を大切な日とし、この日は遠く二千数百年の昔を偲んで、諸の行事をするのであります。

釈尊がほ、だい、樹の下にすわられる前に、永い苦行の時があったことは御承知の通りであります。

釈尊が王者の位を予定づけられた、父王の王城を抜け出られたのは、生やさしい事ではなかったのであります。しかも、最愛の妻子を城にのこしての出城であります。普通の考えをもっては想像もできないことがらであります。し

かも、それをあえて断行されたのは余程の決意であったのであります。いや、単に決意というような言葉ではあらわし得ないものがあつたと思われまゝ。私にして密かに思えば、釈尊を内からうごかした偉大な力がそうさせたものだと信ずるのであります。

さて、その出城の目的は、人生の真実、というものを正しく見、正しく行うことにあつたのであります。その為に、もろもろの当時の聖者を訪れて、道を求められたのであります。その真剣なまなざしが眼にうかびます。王位をかけ、妻子を捨てられた悉太太子のまなざしが澄みきり、常に天上にむかつていたことと思ひます。

聖者が示される道に満足せず、当時の權威ある一大宗教であつた、ばらもん教のさし示す教えに従つて入山して修

行することを思いたたれました太子は、かざしりしや山という山に入り苦行の生活に入られたのであります。印度にあっては、このような修行はめずらしいことではなく、今日に於いても色々のかたちの苦行が行われていると言います。

山にとちこもり、村人の修行者にささげるほんの僅かの食物―「一麻一米」と伝えて居ります―を食い冥想にふけるのであります。断食に近い食生活にあることは、精神の集中には極めて適して居たであろうが、六年の永きにわたれば、身体はやせ衰えてくることは申す迄もありません。太子は実に六十年の山の生活、苦行の生活を続けられたのであります。しかも、その終りに、苦行は人生の一大目的を達するものではないという確信を得られたのであります。

やせ衰えた太子は、よろめきながら山を下られたのであります。この山を下られる時の御心持ちは実に悲痛なものであったろうと思ひやられます。澄らかな水の流れるに、れんぜん河のほとりに立たれた太子は、何か過ぎし日の心のけがれを身と共にさっぱりと清められたこちがされたことと想像されます。

村道に坐られた、太子は、みめ美しい少女のささげる牛乳を召しあがり、やがてぶつだがやのぼだい樹の下に、

やわらかい吉祥草をひいて坐せられた。ここに太子の一転期がみられた。そこで四十九日の間坐せられるのであるが、外に見たところは端然と目をつぶり何ら動揺がないように見られるが、經典の伝えるところによれば、その御ころの中は戦いの連続であった。魔の王、はじゆんは、美女四人に命じ、太子の修行をきづつけようとし、さまざまの恣態をもつて悩まし、心をかきみだそうとはかりました。

「汝等はすがたこそ美麗無比であるが、そのころは必ずしも端正ではない。画いた餅の中に臭毒を含んでいるように、汝等もやがて壊れてゆくものである。去れ」と。魔は更に、怪面、奇眼の鬼をもつて太子をせめ、上に大雷を起し、又熱した鉄丸を雨とふらせ、とりかこんだのであるが遂に太子の心を傷つけ乱すことはできなかったという。心のゆるぎを、喻をもつて現わしたのである。

しかし、この期間枯木のように坐して居られたのではない。太子はすでにらごらの父であった方である。人間である。しかし、勤苦の六年と、樹下の思惟によつて、すでに鍛えられた人である。悩みに悩み、苦しみに苦しみを經た方である。死地にさえつかれた方である。かくて、遂に、釈尊のころに、未だかつて経験したことのない感動がうごき始めました。人の生れ、人の老い、人の病み、人の死

ぬ、という、悩みの根本がみえ始められたのであります。八日のあかつきに至って、豁然と、悟りの確信に立たれたのであります。悟りや、信心の獲得が突然得られるものか、漸次、確というものがここに芽生えてくるものか、は事実と理論に色々言われていることでありますが、少くとも、一つの確信の域に達した時には、何か常時と変った感動がある筈と思います。釈尊にも確かにこれがあつたと思います。この確信、悟りをしばらく自ら楽しめたと、いう、伝えはこれをして居ると思います。それは、それ迄の釈尊のお苦しみを思えばうなづけることと思われまゝ。さて、そのお悟りの内容は何であつたか。或る經典は、その時の様子をこう伝えています。

『魔を降伏して、大光明を放ち、真諦（真実のこと）を思惟（考へること）し給ふ』と。

「人の迷いは、人生に光明が無いからだ。無光明にすべての迷いがあるのである。無光明、すなわち、無明に基いて世界が開展されている。人生が暗いのだ。暗いところに迷いがある。」そう悟られたのであります。無明の暗をやぶって、解脱の境に生れ、とお示しになったのであります。

そして、自らその光明のなかに立たれた時、「大光明を放たれ」たのであります。大光明そのものとなられたのであ

ります。道となられたのであります。釈尊が生れられようと生れられまいと、道は厳然とあります。釈尊以前の七仏もこの道を歩んで覚者（さとれるもの）となり給うたのであります。道に歩み出でられました。これが成道です。釈尊の如き方は、寧ろ、この道から生れられ、我等にこの道に至るみち、すじを示し給うために世に出られたのであります。応化身なのであります。

光明の道とは何んであるか。無明の消えて光明の世界とはなんであるか。それがあみだ仏の世界なのであります。

あみだ仏は、無量寿、無寿光のみ仏であります。大光明を放たれた釈尊は、あみだ仏のおんあらわれであります。

釈尊のお悟りの内容であります。十二縁起、即ち、すべてのものは、もちつ、もたれつしてできている。しかし、光明のない、もちつ、もたれつ、の世界（縁起の世界）は迷いである。光明のある縁起の世界がまことの世界であり、生老・病・死を越えた生と老と病と死と、のなかにありながら、しかも、これに結ばれず、執われず、大光明のなかにとけこんで生きるところにさとりがあり、救いがあるのであります。

光明に照らされた、救いとられた、日々の感謝のくらしが、釈尊のお成道のお示しになった、本当のなかみなのであります。何ものにも悩まされず、乱されず強く生きさして頂く成道のみちなのであります。

（大正大学教授）

念仏の声するところ邪法さかえず

する処、海女
が伏屋も皆我

翻怨以德という古語がありますが、これがわが宗祖法然上人の趣旨でもあります。

上人晩年他宗からねたまれて、念仏停止の朝命を蒙り、土佐の国へ流罪の身となられたのであります。門弟達はいたく悲しみ、念仏の宣布は自からお止めになったとお申し出でになりましたら、御流罪のご沙汰はおゆるしになりました。それから、とお年の上をお案じするの余り申し上げましたら、「たとえ死刑に処せられるともこの事言はずばあるべからず」と、帝の命を奉じ流罪の途におつきになり、四国の民衆へ釈尊の本旨弥陀大悲の称名念仏をお弘めになりました。その後間もなく、陛下の御仁許を賜り京の都へお戻りになり、専心念仏の興行にいそまれてお出ででしたが、弟子達がお年の上を心配して、各宗の祖師方は皆夫々相当の大伽藍道場を設けられてありますれば、わが浄土門でもそうした根本の……道場でも作るようにと申すのか？ 念仏の声

が道場なりとしてお許しが無かったと申します。今では各宗の檀信徒殆どが念仏を申しつづ仏を礼して居ります。

こうした折柄に昨七月十九日、日蓮正宗の新しい信徒でしよう、若い男二人見えまして気の毒ながら浄土宗の滅亡日々にある氣運迫りつつあり、その証として数ある其の宗寺院に祐福なるは殆んど無く、昔の寿命亦且夕に迫りつつある現在、末法万年の今日また当然たるべし、然るに昭和の聖代にくしくも我等が信仰の真の仏教日蓮正宗こそは、当代の時期に即し確たる光輝ある法燈なり。ご用心ご用心など言い捨てて立ち去りました。

その席に居りました百才にはまだ十九年も間のあるこの宗の若輩も殆んど耳がないも同様の不自由な現在、長生きのお蔭で飛んだ一幕を見せて貰いました。

この日蓮正宗は、二三年前から当地方へもコソコソ宣伝があり入信したものもある

り、今は脱退した人もあり、病中医師の手を離れて入信、同信者の当病平癒の祈禱の甲斐もなく遂に没し、葬儀万端その方の手で済ましはしたが、経済上に困って従来の商法も出来ず北海道へ夜逃げした者もあり、新しいものの好きの人が信者になる様ですが、余りに好結果を得て居るとも言えない様です。

兎角勤めに来る人は夢中です。当方から何をいっても耳にしません。有りもしない事を並べたてて他の教えをたたきつぶそうとするだけです。その熱情はよいとしましようか、是非善惡の分別もなく、これより美味しいものは無いと腹一杯食べているのですから、此方はまだまだ美味いと出されても耳にも腹にも通入りますまい。

耳の不自由な老人や女子供ばかりを相手に血氣にはやる二人の若者馬鹿者にも劣らぬ口から出まかせの誹謗惡口で、あとも怨まれる覺がありませんのに飛んだ目にあいました。他にもまたこんな者が舞い込ました。他にも限りますまい、気の毒な人達です。ご用心ご用心。

(円鏡寺八十一老仁広)



垣を越える

念仏生活の倫理性

西川 知雄

日も暮れそうになって、汗と土ぼこりで汚れた一人の旅人が、疲れた足をひきずるようにして、とある村にたどり着きました。旅人の求めているものは、旅の疲れを休めるための一夜の宿でした。村のどの家も、明かるい電灯の下で、家族の人達が楽しそうに夕食をとりながら語り合っています。どの家からも、楽しい笑い声がひびいてきます。旅人は思いました。

「みんな楽しそうだなあ——」

ほんとうに、宵闇の中には、村の平和な空気がほのぼのとただよっているのです。旅人の心も明かるくなりました。それぞれの家族が、それぞれの家族に与え

られた幸福を享受しているからです。

しかし、旅人にはまだしなければならぬことが残されていました。まだ宿を求めているのです。百戸余りの山里の村でしたので、旅館などは、この村にはありません。したがって、一夜の宿を借りるには、どうしても普通の民家に頼まなければならないのです。旅人は、どこかの家で、一夜の宿を求めようと決心しました。

とある家まで来て、案内を乞おうとしましたが、家の周囲には高い樫の生垣をめぐらしてあり、トンネルのようになった入口には、竹で編んだ扉がしつらえて



あり、それが中から閉められてありました。旅人が、その扉をそっと押して見ましたが、開きませんでした。家の中からは、子供の声を交えて、楽しそうな一家の笑い声が聞こえて来ますが、旅人は、目の前の閉ざされた扉を見ると、何か気が引けるようで、無理に大声を出して、一家の笑い声を中止させてまでこの家の人々の幸福を乱したくない気持ちになりました。

「次の家で頼んで見よう」。

旅人はこうひとりごちました。

次の家も、やはり同じことでした。そして、又次の家も、またその次の家も同じでした。いったい、この山里は、秋から冬にかけて北風が強くて、屋敷全体をすっぽりと横の生垣で囲い、風を防ぐように出来ています。そして生垣の中には広い空間があつて、子供達には恰好の運動場となっていました。この空間は、秋のお米の収穫期には、一面のもみ干し場になるのですし、また大根の切干しの乾燥場にもなるのです。家は、この空間のずっと奥の方にあるのです。だから、生垣の入り口からは遠く離れています。

旅人は、根気よく次から次へと廻って行きました。日はもうとつぷりと暮れています。どの家も、明かる

い電灯の下で、楽しい、平和な、夕食後のだんらんが続いています。そのだんらんを包むようにして、高い横の生垣が、家の外との交渉を切斷しているのです。旅人は、生垣の隙間からもれてくる明かるい電灯の光と、楽しくて平和な家族達の声を聞きながら、生垣の外をさすらっていました。

なかには、この山里でも、文化住宅のような家もありました。きつと赤い屋根なのでしょう。テラスのようなものも見えます。この家の周囲は、横のかわりに、カラタチの生垣が作られていました。旅人が、この家に近寄るのを、こぼむような気持が、そのカラタチのとげの中に秘められているように思われました。

又、別の家では、三メートルほどもある高いコンクリートの塀で囲んでいました。しかも、閉じられた表門の扉の横には、

「猛犬に注意」

という板切れが、下げてありました。奥の方の建物の屋根の上には、テレビのアンテナらしいものが闇の中に幻のように見えます。家の中では、家族の者が、みんな仲よく楽しくテレビを見ているのでしょう。時々一度にどつと笑う声や拍手が聞こえてきます。



どの家も、その家族に与えられた平和と幸福を、その家族だけで心おきなく享受しているのです。そして、村全体が、ほのぼのとした平和な雰囲気につつまれているのです。

旅人は、この山里に、社会の縮図を見るように思いました。みんなが、それぞれに、それぞれの与えられた幸福を享受しているのです。みんなが、それぞれの垣の中で、幸福を享受しているのです。しかし、垣の中の人々はそれで、よろしいでしょうが、垣の外の旅人は、その幸福の享受の仲間入りが出来ません。垣の中の人々は、閉じられた社会になって、その人々だけの幸福を享受しているのではないのでしょうか。恰かも、自分たちだけの幸福を抱いて、垣の中というお城の中に籠城しているのではないのでしょうか。

「これは、私のひがみかも知れない」

旅人は、そうつぶやきながら、又もや宿を求めて歩き出しました。そして、とうとう今まで来たとは反対の、村の出口にまで来てしまいました。道の右側の高い丘の上に変電所があります。旅人は、その変電所へ上って行きました。変電所には清潔な感じのする二人の青年の勤務員がいました。その青年達は、旅人の

話を聞いて、丁度、宿直用の寝台が一つ空いているから、そこで一夜を明かすがよいと言ってくれました。

変電所からは、村全体が一望のもとに見下ろせます。どの家々にも電灯の光が明かるく輝いています。

そして、思いなしか、家々から楽しく平和な笑い声が聞こえてくるようです。ほんとうに、村全体が、電灯の光とともに、楽しく温かな雰囲気の中にひたっております。この変電所から送られる電力は、どの家の垣をも越えて、どの家へも差別なく、平等に、明るい光を分配しているのです。

垣の中の人々の享受している幸福、閉じられた社会の中に籠城している人々の享受している幸福は、意外にも、これらの垣や城の外から、すべての人々に別け距てなく供給されている。すべての人々を包んでいる大きな力によって裏付けされているのです。電灯の光の下で楽しく語らっている家族の人々は、その幸福の根源である電灯の光を、実は、その家族の垣の外から供給されているのです。

人々は無意識に、自分達の垣の中で、城の中で、自分達だけの幸福を享受するという仕方をしてしています。ところが、その幸福の根源は、垣を越えた、城



の扉を越えた、もっとも多くの人々を包んだ大きくて広い社会から供給されているのです。人々は、心の中に、目に見えない垣をつくり、城を築いて、その生活の幸福の源が、開かれた社会によって与えられていることを忘れて、自分の垣や城の中でその幸福を享受しようとしているのです。

一般に、人々は、大きな社会によって生かされているのです。それなのに、人々は、狭い垣の中で、城の中で、生きようとしているのです。
法然上人のお歌に

さへられぬ光もあるををしなへて

へたてかほなるあさかすみかな

とあります。「さへられぬ光」とは、人々を生かそうとしている社会の作用です。「へたて顔なる朝霞」こそは、人々の心の中に築かれた垣であり、城であります。生かそうとしている、社会の大きな抱括力に対して、人々は狭量にも、自分の心の扉を閉ざしているのです。

自分の垣や城の狭小さ、利己的な殻の醜さを自覚

し、大きな社会の「生かそうとする」力に参加することとを、宗教的に表現すれば、それは「念仏」することになります。

社会が人々を生かそうとする「無量」「無辺」「無礙」の作用力は、阿彌陀仏の無量光、無辺光、無礙光として表現されます。この広大な光に抱かれていながら、自分の垣の中、城の中に閉じこもろうとするのが凡夫性であり、反社会性であり、罪障です。念仏生活は、このような自己の反社会性、罪障を自覚することによって、社会の作用力に参加し、自己が生かされ、同時に自己がまた他人をも生かすべく社会の作用力の一分を担うことです。従って、念仏生活そのものが倫理性をもっているのです。念仏以外に、別に倫理があって、それが念仏生活の助業となるものではありません。念仏生活そのものが、助けを必要としない。独り立ちした倫理の実践なのです。

(三重県立大学助教授、哲学・倫理学)

鐘談義

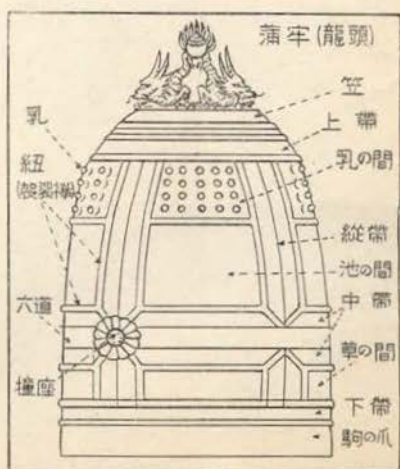
養田実

除夜の鐘を聞きながらいつの間にか新年に踏み込むことになった。永遠の時の流れの中で昨年と今年の境が人為的に出来ているだけで宇宙の輪廻に境界は無い。天地寂然として動かず而も気機は息むことなく停まること少し、日月は昼夜に奔馳し而も貞明は万古に変わらずと云う訳である。それでも正月を迎えれば気分も新たに色々の理想や計画が出て来ることだろう。

鐘の音はいつ聞いても良い。やはり日本人にはカン高いチャーチベルよりも梵鐘の

音の方がびったりする。「鐘は上野か浅草か」何とも云えぬしつとりと落ちていた平和の響が感じられる。「祇園精舎の鐘の聲、諸行無常の響あり」こうなると世間の無常がしみじみと身に沁みてくる。やはり仏教的な味である。東洋の精神文化の源泉がここにあるような気がする。鐘もベルも材質的にはそれ程甚しい違いはないが形と撞き方が異っている。鐘には梵鐘、喚鐘、時鐘、警鐘、楽鐘など色々種類があるが何れも円筒状で外から撞くのが特徴である。寺院に

設置される梵鐘については此の形状に昔から定めた方式と名称が出来ている。それを図に示した。この内容について立ち入ったから長くなるので省略するが、どの梵鐘も時代によって夫々傾向特徴はあるけれども皆この方式形態をもっていると考えてよい。このような方式の由来。寺院と梵鐘の由来。特に梵鐘を製作した所謂勅許御師と云う特殊技術者と昔の社会制度。先史時代から開けた金属文化としての鳴物合金など色々難かしい問題が横たわっている。十



年程前から鋳物師と梵鐘に関して調査を進め、発見した新資料に就いては一部発表した事もあるが、とも角梵鐘を一個作ると云うことは資金的にも技術的にも昔も今も仲々大変な仕事である。全国で七万二千程の寺院があると云われる。これには末寺や尼寺が含まれているから戦前梵鐘を所有していた数は約三万六千程でもあろうか。その中約九割が今度の供出でなくしたとするとその数は約三万二千余りになる。これだけの鐘無し寺院に対して全国に数える程しか存在しない梵鐘メーカーがその生産能力を充分發揮したとしてもそう短期間に全部作れるものではない。門徒の金づまりと云う事もあって戦後既に十三年を経た現在でもまだ半分迄出来てはいまい。

京都奈良方面には古い鐘が多くある。中でも知恩院の鐘は東大寺、方広寺と共に日本一大きい。口径が九尺六分もある。九尺以上の大鐘はこの三つで何れも同様の寸法であるが、知恩院のを見ると駒瓜の厚さが九寸五分、高さが四寸もある。草の間が広くて模様がなく撞座の位置が高く下から約

一米もある。全体が低くて満腹感をもった鐘である。寛永十三年に京都の鋳物師が作ったものでこんな大きな鐘は現在に至る迄その後作られていない。明治になって四天王寺に口径一丈六尺と云う超大鐘が出来たが鳴らぬ鐘で結局壊された。

先年、遅時乍ら増上寺の鐘を拝観し、寛永寺や浅草寺よりも遙かに大きく而も古い鐘である事を知って今更のように驚いた。知恩院より卅七年後の延宝元年の作で寛永寺より九年、浅草寺より十九年前に出来ていた事になる。増上寺と寛永寺とは同じ椎名伊予の作であるが規模も作柄も大部異っている。草の間の狭いのは椎名に見られる此頃の特長のようであるが、乳が偏平で珍らしい新機軸を出しており、大きいばかりでなく寛永寺の粗雑な作りよりも入念に出来ている喰りも寛永寺や浅草寺のようにせわしくなくゆったりして大鐘らしい。

一般に梵鐘は妙心寺を始めとして奈良朝、平安朝の頃が良いとされ徳川時代のものは駄作として余り顧みられない。関東であれば精々鎌倉の建長、円覚と云ったよう

な鎌倉時代のものが対象にされる。然し江戸時代の鐘の大部分が供出で失われた今日では珍重がられなければならない時が来ていると思われる。成分的には時代によって著しい相違はない。

要するに銅と錫の合金であって、近頃では錫が十一・十五%というところであろう。従って勿論ブロンズ即ち青銅である。錫が多い程良いと考えたり、金銀を加えれば鳴りが良くなるなどと云う言い伝えは何れも根拠のないことである。増上寺の鐘も江戸の古鐘としてあの山の高台に据えて近隣に響かせたらどんなによいであろうと思う。関西に匹敵する東京の名所になること間違いない。俗化を好まぬにしても浅草寺や寛永寺などより遙かに環境もよいし折角のものを何とか実現するように心から希望したいと思う。

(富山大学工学部助教授)



調査進む徳川家の墓所

杉 本 信 雄

浄土宗の大本山増上寺は一三九三年の明徳四年、時の幕府徳川家代々の菩提所として創立開山された。第二代將軍秀忠公以後、上野寛永寺とともに徳川家累縁の遺体が埋葬され秀忠公をはじめ十四代家茂公までの六將軍とその夫人、子女あわせて三十一体が眠っている。

六將軍とは台徳院（二代秀忠公）文昭院（六代家宣公）有章院（七代家継公）惇信院（九代家重公）慎徳院（十二代家慶公）昭徳院（十四代家茂公）であり、歴史に名をとどめる大奥の夫人たちとしては、徳川の政治を動かしたと伝えられる桂昌院（五代綱吉公の母）宗源院（秀忠公夫人）天英院（家宣公夫人）月光院（家継公の母）広大院（十一代家齊公夫人）の他幕末の犠牲者として同情を集めた「皇女和宮」の静寛院（家茂公夫人）らである。

台徳院の南御霊屋を除く三十体は増上寺北側の北御霊屋に合祀されているが、左図のように最上壇には家宣、家慶、静寛宮、家茂公の四基、中壇に家継、家重公の二つ、下壇に

秀忠公夫人らの子女の墓が配置され、その格式は厳しかったとみられ、宝塔の規模もそれに従っている。

これら三十一基のうち先きの十二基は重要文化財（建造物）として文化財保護委員会の指定を受けていたが、徳川家の現当主家正氏は、南北両御霊屋の土地二万余坪を西武鉄道会社売却、西武ではここに一大国際観光ホテルを建設する計画で今年初めから整地工事にとりかかった。そこで徳川家では現増上寺御本堂北側の五百坪を新墓地として三十一遺体の改葬を東京都を経て國に提出した。

都では三百余年の歴史を秘める貴重な史跡の消失を憂い「何らかの方法で保存して欲しい」という意見をつけて國に上申ししたが、かつては華麗を極めた霊廟も度重なる戦災で焼失、建造物として重要文化財に指定されたいきさつからみても現在残っている宝塔だけではその意義も認めがたいと今年五月、文化財保護委員からも指定を解除された。

二

このように「寛永九年一月二十四日、五十四才で病没、同二十七日江戸城西丸から三緑

山(今の増上寺)に埋葬された」と記録にも残る秀忠公をはじめ、当時最高の階級にあった將軍家の墓がとぎれとぎれながらも十四代まで連続して一カ所に埋葬され、しかもこれが改葬されることは、墓制史、考古学者にとつては見逃し得ないチャンスだった。そこで文化財保護委員では、「この際學術調査をさせて欲しい」と徳川氏と西武鉄道会社に申入れたことから「徳川靈廟調査」という画期的な試みが着手されることになったわけである。

調査は第一期として南御靈屋の台徳院靈廟跡、第二期で残る北御靈屋の文昭院など三十遺体の発掘が予定され、去る八月から(一)石室と棺(二)副葬品関係(三)遺体の三部門に分かれて行われている。(一)には藤島友治郎東大教授、田辺泰早大教授、福山敏男国立文化財研究所技術部長(二)に後藤守一明大教授、矢島恭介東京国立博物館考古課長(三)は鈴木尚東大教授の六学者が当り総合的にまとめあげる。

その目的は述べるまでもなく、古墳時代について目立ってきた近世の墓制史を解明するとともに、遺体の埋葬方式、副葬品などを通

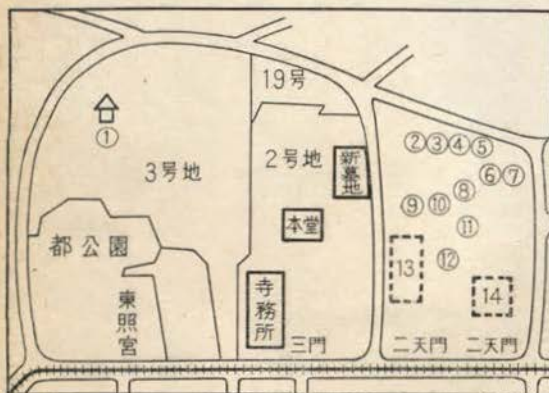
じて当時の風俗、習慣を知ろうというものにことに秀忠公など江戸初期の墓は、これまで学問的な調査が行われた例がなく、江戸三百年の文化を築いた墓を解明できる点が高く評価されている。

三

第一期調査の台徳院靈廟の発掘は八月三日から現場の調査が行われ二週間で完了したが今は各分野にわたり詳細な分析、資料照合などが行われている。調査団では今年一ばいで終る第二期調査の完了をまつて総合的に検討を加え学会に発表することになったが、今までの調査結果によると、台徳院靈廟の状態は次のようなものである。

発掘は無惨にもくずれ落ち昔日の面影一つとどめぬほど荒れ果てた靈廟の基礎石をはがす仕事から始められた地下約二・七メートル掘下たところ、そこに縦、横、深さとも一・八二メートルの石室が現われた。その底

には九個の台石がガツチリと並べられ、上にヒノキ造りの板輿(板で作ったかきカゴ)が置かれている。この大きさは高さ約一・二メートル、縦、横各〇・九メートルで板輿全体が綱糸を縫に織った布でおおわれていた跡が認められた。しかし今から三百二十六年前の寛永九年の古さのため、布地は無論、分厚いヒノキの板も朽ち果て調査団一行は改め



- | | | | |
|----------|----------|-------|-------|
| ① 台徳院 | ② 文昭院 | ③ 愼徳院 | ④ 静寛院 |
| ⑤ 昭徳院 | ⑥ 有章院 | ⑦ 惇信院 | ⑧ 崇源院 |
| ⑨ 桂昌院 | ⑩ 月光院 | ⑪ 天英院 | ⑫ 広大院 |
| ⑬ 文昭院靈廟跡 | ⑭ 有章院靈廟跡 | | |

て歴史の流れに思いをはせたという。さらに板輿の下にはかつぎ棒を差込むための金具が付いていた。

棺はこの板輿の中に収められており、高さ

一・二メートル、縦、横ともに〇・八一メート

ル。座棺で四隅を丸く削落しちようど風呂桶の形。材質はこれもヒノキと認められたが、

竹のタガをかけた質素なものである。蓋は土砂の重みと腐敗により崩落し、棺には小石が

一ぱいつまり、秀忠公の遺体は押しつぶされていた。しかし肉付の付着した骨、毛髪、ツ

メなどは明瞭に認められ遺体は死僵化していた。このため顔をはっきり見ることは不可能

だったが、遺体は「あぐら」をかけた形で収められていることが確認された。また手足や

骨格からみて身長は一・五八メートル、五尺二寸ちよつとといったところ。現代人よりは

低いものの当時としては平均の身長。背丈に比較して骨は太く、特に筋肉の部分が発達し

ていたのが目立った。このことは乱世の武人を代表したタイプで政治家というより戦国の

世を生き抜いた豪傑だったことが読み取れるという。また江戸後期の大名のほとんど弱々

しい体格だったのに比べよい対照をなしているとのことである。頭髮はいわゆるロマンスグレーだが腕とスネの毛は黒々とし五十四才の初老の面影はあまり認められないという。

身に着けている衣装は朱が僅かに混る白地で綾、倫子ちりめんなどが使われ、腰の下に

は緞子の褥をあてている。遺体の正面に向って右側には黒漆のサヤ付きの太刀一振がツカ

を下にして立てかけてあり、左側に同じ漆塗りのサヤがついた脇差が横たわっていた膝の

前方には長さ約三〇センチ、竹骨に金箔の扇面を張った扇子と笏（しゃく）が各一本あ

り、紗の生地で作ったエイ（冠の背面からまゝ垂れ下った布）のついた冠が僅かに残っ

ていた。これにより葬られた頃は、衣冠束帯で座していたことが判明する。さらに棺と板

輿の間には綾絹に包まれた種子島銃（全長一・三メートル、銃身一メートル）と徳川家の

紋章「三葉葵」のついた漆塗りの槍のサヤらしいもの、梨地の手箱、簾を巻きつけた木杖

などが置かれ、輿の正面には陶製の香炉と「ねり香」が供えられてあった。香炉の状態

からみると埋葬は、このねり香をたきながら

行われたらしい。さらにこの石室は約〇・九メートル四方長さ約二・八メートル、重さ千貫の伊豆石二本で蓋がされていた。石蓋の上には法前八角形の蓮華座があり、その外側に外陣が設けられ、これら全体で靈廟を形どっていた。

四

このように秀忠公の墓は徳川幕府の基礎が築かれた初期のものであり、立派な外観から内部もさぞ豪華なものと思われたがその質素ぶりには調査団も驚ろくほどだった。座棺や石室も荒っぽい仕上げであり、石室は地目が整っていないため、木の根が入り込んで棺の内部まで伸びている状態。この埋葬方法の素朴さについて調査団では「後世の棺が桐、ヒノキ、銅の三重造りになっているのに比べ想像以上のものだった。戦国の混乱期から抜け出たばかりで、埋葬方式も確立していなかったためだ。」といっている。

副葬品関係では数の上では少なかったが、当時貴重な武器であった種ヶ島銃、オランダ製と推定される前述の香炉など国宝級のものもあり、文化面では秀忠公着衣の綾織り紋模

〔説明〕

発掘された二代將軍徳川秀忠公の座棺。質素なヒノキ作りの風呂型で竹のタガが上下に回わされている。手前矢印は火縄の種ヶ島銃。



など大柄で派手であった点などから當時はまだ桃山時代の風潮が根強く残っていたことが認められた。さらに宗教面では、文箱の中には経文のかわりに公の龍衣が入れられていたり、ねり香をたくだけで、防腐用としての炭

てられている。

興味ある問題としては、秀忠公の墓が非常に質素だったのに比較、埋葬方式の進んだ後代の墓が、どのような具体的形態で現われるかである。今迄の例でも夫人の墓には副葬品

朱などがみられないなどどう理解すべきかが大きな課題となっている。

五

つづく第二期の調査

は既に六代文昭院、十二代懐徳院、十四代昭徳院、静寛院、七代有章院、九代惇信院の順に進められているがこのほか桂昌院、崇源院、天英院などの大奥夫人、十八基にのぼる各代將軍の側室、子女の墓も現地発掘を年内に終る予定がた

の種類も多く、品も華かだったことから、將軍家というハイクラスの子女が描く多彩な史料を目のあたり見られ江戸風俗史の面からも大きな期待がかけられている。

さらに秀忠公は骨格からみて戦国の武士の面影十分だが、いわゆる大名タイプの骨格が代を追ってどのように芽生えてきたかなど、ことに皇女和宮で知られる静寛院がどのように祭られ、どういう女性であったか、数々の文献とどこまで照合できるか学術的意義は極めて大きいわけである。

(筆者・毎日新聞社勤務)

生きた伝道に浄土トラクトを

大正大学教授 佐藤賢順著

○信仰へのみちびき

- 目次
1. 大慈悲の仏教
 2. 知性を超えて
 3. 美的情感を超えて
 4. 本願の不思議にて
 5. すべてを包む愛
 6. 人生は信ずる心から
 7. お導びきのまにに

B 5 版16頁 定価15円 送料 8 円

近代高僧伝

大野法音伝



広々と果てしなく続く濃尾平野が、東にせまって木曾川に接するところには、幾筋にも分かれた小川が清らかな水をたたえている。曾って今昔物語集の著者が「尾張の国は減びて田畑を作らず」といった出水のはげしかった平野には美田が続き、昔の面影是一片ですら留めていない。そのような地勢にいだかれた尾張国海西郡市敷村東保に、法音が生を享

けたのは安政三年十月六日のことであつた。父は大野利左衛門、母をすみ子と言ひ、彼はその次男として生

れ、長兄は家をついで農業を事とした。慶応二年、十一歳の時、伊勢大得寺の西山白

道に就て得度し、明治六年八月川端地藏院の川柳靈宣の附弟となり、その秋上京して増上寺山内現有寮に入つて加行を受けたが、現有寮の寮主こそ後の大僧正山下現有上人であつた。この時以来、現有と法音は師弟のよしみを結び、終生師と仰いで尊敬してゐたといわれ、加行後赤坂専修寺に随身してゐた時、現有は「大野はまだ随身か、二十にもなつてなぜ学校に行かぬ。将来は学校に入らぬと、人がものにしてくれぬ」とはげまし、学校に行くことをすすめられた。これが動機となり、憤憤勉勵して、同九年七月増上寺山内に設けられていた宗学林に入学したが、学資が乏しかったので薪炊の勞をとりな

がら教えを学び、翌年宗学林が知恩院に移され、西部大学林が創立されるに及んで法音も亦、ここで学ぶことになった。時に哲學（学林長）は久世明山で、その下に勸恩義城・黒田真洞・山本大善・岸上恢嶺が教授の任にあり、此等の諸師について宗余業を究め、四力年在学、業成りて後、同十四年十二月鳥羽濟度院に住した。

昔から「一掃除二勸行」と言われ、行に重きを置いてゐる。清淨の地にまた莊嚴備わり、自から仏境として、他の人々の尊崇にあたいする寺院となるのである。従つて法音も、この「一掃除二勸行」の古誠を勵行して一日としてゆるがせにすることはなかった。盛夏の炎天下であらうと、冬の日であつても暇さえあれば、境内に出て草とりをしてゐたという。大正十四年六月次のような、十カ条より成る「日訓」を作成したが、この中にも「朝夕ノ勸行ハ勿論内外ノ掃除必ズ怠ルベカラザルコト」という一文が厳然として附加されてゐる。

一、国王仏祖父母ノ恩ヲ夙夜忘ルベカラザル

コト

一、身分ノ何物タルヲ問ハズ、信施財施ヲ以テ教養ヲ受ケタル者ハ、朝夕神仏ニ対シ、必ズ称名礼拝スベキコト

一、敬上慈下ヲ実行スベキコト

一、日課念仏忘ルベカラザルコト

一、朝夕ノ勤行ハ勿論、内外ノ掃除必ズ怠ルベカラザルコト

一、言語ニ発スルコトハ、先ヅ自身ニ之ヲ行ヒ、己ニ欲セザルヲ示スベカラザルコト

一、彼ガ短ヲ談シ、己ガ長ヲ頼ムベカラザルコト

一、節候力行ハ肝要タリト雖、応分ノ施シ寄附等ハ深ク致スベキコト

一、各自勉強ヲ怠ルベカラザルコト

一、時間ハ必ズ励行スベキコト

此等の条目は弟子達にあたえた訓誡であると共に、自からの守るべき規範として定めたものであって、法音は身を以て、衆に先んじて実行し、地方に教して弘法にこれつとめた。

明治二十六年のことである。松坂に大火があり、八十二戸を炎上し、時に伊勢の古刹樹

敬寺も灰燼に帰してしまい、再建は意の如く

ならなかった。時の住持田中篤順は此の上は高德の僧を迎えるにしかずと意を決し、檀徒にはかり、白羽の矢は法音に向けられた。一時は固辞したけれども、現有の「大野ならよい。どこまでもつづく」の鶴の一声で、全てはきまってしまった。二十九年九月、法音四十一歳の時であった。以来焼野原と化した寺地にたたずみ、夏の炎天下をいとはず草とりをするやら、空地に蔬菜をつくって施肥に従い、又早起をする等して如法につとめた結果、信望を得、寄捨を重ねるものも現われ、原田二郎翁も後日、師の護法の念つよく、力行厳持の生活にいたく感激して信徒となり、梵鐘と鐘楼を一手のもとに建立されたのであった。以て師の志操の一端を知ることが出来よう。本堂は童住以来五カ年の月日を閲して三十四年八月落成を見、翌年七月庫裡の竣工を遂げ、輪換の美備わり、大正八年正僧正准司教となり、同十三年七月大本山清浄淨院の法主となられ、十二月司教に進み、昭和五年大僧正となった。

淨華院に住した時、師は「大きな寺へ移れば、又従つて沢山の弟子を養成する事が出来るだろうと、全く一人でも多くの弟子を養うために、こちらに來たのです」と述懐されている程に、弟子の養成に意を用いたが、それというのも多くの弟子の中には「たとえ少しなりとも、愛宗護法の念をもって働いてくれる者が出てくるだろう」という、ひそかな望みを期待しての故で、一生の間に育成した弟子は九十三名をかぞえたという。「あの弟子は良いナと云う弟子は、キツト朝夕私と一緒に勤行もすれば草もとリ、掃除もしている者で、かゝる者に限つて人にも愛せられている」「大休草ヒキやら掃除をする者でない」と良い坊主にはなれない」ともいって、良い弟子をつくるのに苦心はなしたが、それとも思うようにならなかつたらしい。粗糲節儉を旨とし、僧風の古規を清守して、近世布教の權威といわれた師も、淨華院在住七年余にして、昭和六年十二月七日、腦溢血のため、世寿七十六歳を以て示寂せられた。法名を宣蓮社暢譽上人広阿無礙弁法音大和尚という。

(大橋俊雄)

筆

毛筆の手紙

随

安藤 正男



小

話

大仏様は

何時だった

最近私は或る人から珍らしく毛筆の手紙を戴いた。今迄にも毎月一回の交信は欠かさず、時折はお目にかかってもらったのだが、私には毛筆書の手紙が何か珍らしく感じられたのである。その女は昔会社で私がお世話になった方の奥さんで、旦那さんは日支事変の中頃に出征され、山西省の主都、太原の近くで不幸にも戦死されて仕舞った。残された夫の忘れ形見、当時五歳の男の子を立派に育て上げ、近く花嫁さんを迎える迄に漕ぎつけたのである。只でさえ女手一つで子女の育成は仲々容易な事ではない。ましてその間の二十年を振り返ると、私共は既に、過ぎ去った悪夢として忘れかけている恐ろしい数々の事がらがあった。熾烈

な戦禍の拡大、学童の疎開、饑饉は本土南端からの空襲を受け、各重要都市は昼夜の別なく爆撃を受けた。そして戦争の末期には一日として心休まる日とは無かったのだ。勿論それと並行して凡ゆる必需物資の不足は、私達の生存を絶えず脅やかしていたのである。こうした中で育英は平時のそれとは逆も比較にならない。

たった一人のその息子さんはすくすくと育ち、学校を出ると目出度く試験にパスしてA紙の記者となった。当初は衛星都市の或る支局詰め、然し諸事順調に運んで良縁も調い、近々に華燭の典を挙げると書かれてあった。

某仏教系の大学生四・五人が鎌倉名所めぐりに出かけた。北鎌倉で下車し、建長寺・円覚寺・八幡宮等を見学の後長谷の大仏様にお参りした。その時大仏様の前には幼稚園に通っていると思われる位の子供が数人遊んでおり、親しげに近づいて来た。見るからに可愛い子供達で学生も一言二言話しかけた。すっかりなれた子供の一人は学生に向って、

「奈良の大仏と長谷の大仏とどちらが先にたてられた!」

と尋ねた。学生達は突然のことなので、瞬間分からなかったが、考えなおし、

「奈良の大仏は天平勝宝四年(七五二)

それから幾月か経ってその方は上京、要務を済された後、私の勤務先に訪ねて来られた。

『先日はお手紙を有難う御座居ました。この頃では筆でお書きになるんですね』月並な挨拶の後私が手紙の御礼を述べる

と、
『はい、猛（息子さんの名）が私の字が読み難いと言うものですから。筆ですとどうしても字が丁寧になりますから読めるかと思つて……この頃では筆で手紙を書く練習をして居ります』私はじんと胸に迫るものを感じた。否、私の感じたのは無限な「人の母の愛情」である。世俗に「四十の手習」と言う辞があるが、今迄膝下に育てて来た一人息子を、一社会人として世に送り、それにつれて交通が繁くなると、読み難いと言われた自分の筆蹟を矯めようとした母親、その愛情は無量甚深であり、秀峰のような気高さを感じとられる。

降る星のような世の母親の愛情を憶う時、私は古来洋の東西を問わず、所謂賢母と言はれた人々の事を想い出してゐた。速く孟母三遷、孟母機を断つ、等は余りにも有名であり、又、我が国では近江聖人中江藤樹の母あり、医聖野口英世の母等々。就中筆者の恩師故矢吹先生（号隈溪、文学博士矢吹慶輝師）は偶々野口博士と同郷だったので、時に触れ折に触れ英世の母の物語りを聞かされたが、畢竟少年清作を世界の「野口英世」に迄育て上げたものは、ひとえに母の愛情であつたと私は憶う。

最近ではペン字、横書が益々普及し、履歴書すらもがペン書となつて来ている。然しこの毛筆の手紙には又別の意味合と、母の愛情とが秘められているようだ。そしてその筆先こそ何時迄も愛児を正しく導く事であらう。

—一九五八、一〇、一—

（筆者、日活会社勤務）

に開眼供養を行い、長谷の大仏は建長四年（一二五二）に建てられたのであるから、奈良の方が五百年も先だ。」

と答えた。

すると子供達はそれぞれ笑い出し、お兄ちゃんちと弱いね！と左の手で自分の頭を指した。ちつと待てよ！と学生達は真顔な顔付で再び考え出したが、どうも自分達の考えに間違いがなさそうである。学生達は平気で奈良の大仏様の方が先に建てられたのだよという、子供達は笑いが止まらぬという様子で、

「奈良の大仏様も長谷の大仏様も立っていないぢやないか。いつでもも坐っているではないか。」

といって、ぱつと四方に逃げ散った。学生達は怒ることも出来ず、ゴクンとつばをのんだ。

なるほど、大仏様の建立を考えるより子供達の云わんとした事を考えればよかったわけである。

建ったと、立ったでは考えるまでもない。
（光蓮記）

播磨路に室津を訪れて

戸川 靈 俊



室 津 港

銘の墓に、それ供えて帰ってゆく。

本堂の前の苔むした遊女友君の石塔にも、

誰かが供えた花が新らしい。

「あの方は旧本陣の奥様なのですよ」

さつき住職に会釈していった品の佳い中年

の婦人の、観音堂脇の真新しい石碑に、掌

を合わす姿が目につく。

参勤交代の日、九州路の大名は、瀬戸内海

の風景を賞でながら海路をここ室津に上陸し

て東したというし、又、下りは長の陸路をこ

こ室津で舟にうつりお国帰りしたともいう。

「薩摩様」お泊りのその旧本陣も、時の推

移に今は劇しい変り様であらう。

室津の港は、遠く行基菩薩が定めたという

播磨五泊の一つだ。古くは唐との貿易の要衝

であったし、維新前では九州・四国との海陸

の往来も繁かった。それゆえ、どの港の例に

ももれず、この港もつねに華やかな遊女らの

嬌声がささめいていた。

このことは西行の撰集抄長門本や平家物語

や金葉集などにも窺えるところだ。

この国の遊女発祥最初の地とも云われる

位、その盛り日の室津の賑わいが想像される

程だ。

町には真言宗見性寺というのがある。この

寺は昔、遊女づとめをしていた室の長者の娘

が建てたと伝えられるが、およそ異越の旅客

を送り迎へに明け暮れる浮川竹の運命の遊女

私の室津を訪れた日は、ちょうど旧盆の日
だった。浄運寺には寺参りの人がしきりなし
だ。

本堂の外縁に用意されてある檜花や盆灯籠
を手にすると、人達は海を見下ろす裏山の銘

らに、長者の娘も交るといふのは、港を挙げ
ての「外者款待」のおきてが、一面では遊女
の形として現れたことを物語るのではなから
うか。

古い港町、遊女、疣駅——こうした言葉か
ら、私は、亡んでしまった疣顔の美の名残りを、
予想して室津に入った。

けれど、予想は外れた。終りとはいえ夏の
真昼の太陽の下で室津の町は、極めて健康的
だった。

相生行のバスを室津東口で降りて、だらだ
らと町に坂を下ってゆくと、細い石畳の道に
ぶちあたる。この道をはさんだ両側の二階家
のはり出しの手すりに、格子戸に強いてそう
想えば僅かに過去の名残りと云えなくもなか
ろうものがたゆとうている。しかしこれは飽
く迄、私の幻想に過ぎないが。

姫路を中心に西は相生、赤穂にかけて、阪
神に摩する播州の重工業地帯の中に、ぽっか
りと残された景観の美、その中心が室津なの
だ。詳しくは兵庫県姫路市御津町室津港。
瀬戸内海国立公園はここから始まる。静かな
海に向うに小豆島が、それよりやや離れて家

島群島が指呼に望める。

網干から約七杆にある良港、岩見から室津
まで二杆の間に、岬をまわり谷を渡って山腹
を縫うように切り拓かれた「七曲り」のドラ
イブ・ウェイは、播磨の海岸の平明な風光に
つよいアクセントを打っている。

青い空と紺碧の海、それを背景の宝津の町
は健康だった。

丘の美しい小学校の校舎から集合日の学
童らの元気な声が聞える。

私はお寺に行く前に、賀茂神社に詣でた。
社は港を深く包みこむように、南につき出た
岬の上にある。桃山時代の作といわれる神門
が素晴らしい。うばめかし等の暖帯樹林に覆
れて、神門の前の蘇鉄の大樹と共に千古の夢
に訪う者を誘う。

夏の真昼の社は誰一人訪う人もない。時候
の佳い頃には、謡曲の名のゆかりで、謡の会
がときどき拝殿であるそうだ。神社では、千
余年の由緒をもつこの方が京都のよりはさき
だと歴史を誇っている。じじつ、源頼朝の教
書や、足利尊氏の下文や、古法眼狩野元信作
の文化財「神馬図」、近くは明暦中神原氏奉

納の朝鮮僧使米聘録等を蔵して歴史学者の訪
れる者も多いようだ。

つよい海の荒れに法然上人を乗せた流刑船
はしばし此の港に難を避けた。この時、上人
が船中からではあるが、心こめて拝されたの
は「室の明神」この賀茂の社なのだ。

上人と賀茂——宗門の史家に訊かねばなら
ぬが、この両者には深い関係があるのだろ
う。先年、京都のある旧家の所蔵でみた上人
母方の系図では、母秦氏は賀茂の社家の出で
あり、叔父の一人は比叡の僧となっている。

これも、いつか鴨嶋研究会で拝観の機を恵ま
れた。真筆一枚起請文は京都下鴨神社の社室
として収蔵せられ、維新前までの年一度の神
社の虫干しには一般に公開されて、都人士女
が群参して随喜渴仰の涙をこぼしたらしい
。

上人仮泊のことは知って、この港の遊女が
一葉の舟を棹さしてこぎよせ、罪業深い自身
をなげき、上人に救いの道を求めた。このと
きの法然上人のねんごろな教えの言葉は、

……述べるところ、誠に罪障かるからず。

酬報又はかりがたし。過去の宿業によって、

今生の悪身を得たり。現在の悪因にこたえ

て、当来の悪果を感じん事疑いなし。もしこ

のわざのほかに渡世の計あらば、速かにこの

悪縁を離るべし。たとい世の計なしという

も、身命を顧みざる志あらば、またこの業を

捨つべし。もし又余の計もなし、身命を捨つ

る志もなくば、ただその身ながら専ら念仏す

べきなり。弥陀如来汝がごときの罪人の為

に、誓いをたて給える其の中に、女人往生の

願あり。然れば則ち女人はこれ本願の正機な

り。念仏は是れ往生の正業なり。ふかく信心

を發すべし。敢えて卑下することなかれ。罪

の軽き重きを云わず。本願を仰いで念仏すれ

ば如何なる榮の卵、苔の筵なれども、所をき

らわず臨終の夕には、弥陀如来無量の聖衆と

共に來りて引摂し給うが故に、往生疑いなし

……

というのであった。

なんとという力強い言葉だ。

そして与えられてのが

かり染め色のゆかりの恋にだに

あふには身をおしみやはずる

の御詠であると云われている。

室の津の一片舟上に、しみじみと教えを垂

れ給う法然上人と、うなだれてそれを聴く遊

女との二つの姿を幻に画いてみた。

ひとりとは、この暗黒の時代に輝く最高の聖

者、ひとりとは罪業に汚れては絶望のどん底に

おののく一遊女——この最高なるものと極低

なるものとの対比。

「流刑さらにうらみとすべからず……いま

事の縁によりて、季米の本意をとげんこと、

すこぶる朝恩ともいうべし……」

といささかのなげきも述べられなかった

が、それでも流人藤井元彦の名の下に、流刑

におもむかる逆境の極の日の老上人と、時

代の犠牲となり木曾義仲愛妃の前身が罪業転

落の身をかこつ港の遊女と共に現身の不遇逆

境をいたわり合う同一水平線のもの。

私は、対比と同一線の二つの意義を考えて

みた。

最高の聖者によってでなければ極低の罪人

は救われぬだろう。と同時に、都を逐われた

一罪囚の言葉でなければ救いなき絶望の彼女

は言葉のうちに真実の慰めを汲みとすることは

できなかったらう。

法然上人伝記の中でも、この室津における

「遊女化導」の章は、特異の深い意義を帯び

ていると私は思う。

浄運寺は、賀茂神社とは丁度反対の側の丘

の上にある。旧盆で漁は休み。寺へ数歩の家

並の間の小径の両側には、赤銅色の漁師や老

婆達が砂に足をなげ出してしゃべっている。

法然上人霊場第三番の石標と、県境定のユ

ース・ホステルの木標が、階段の下に目に入

る。

よく冷えたお茶を頂いている間に、もう時

間、やがて住職は

「これから棚経にまわるので。どうぞごゆ

っくり」と挨拶されて、門を出てゆかれる。

本堂に昇り、法然上人の「ゆかりの御影」

に一柱を焚いて小経を捧げた。この御影は上

人が自ら御頭をきぎんで与えられたのに、か

の遊女友君が墳土でお身を作り、終世拝して

ている七十四才の日の真影なのだ。

住職夫人から、この寺の数々の宝物を見せてもらっている間、今月この旅に私についてきた中学二年の次男は、宝物よりも何よりも、この湖のように静かな入江に飛びこんで逝し夏の青さを心ゆくまで楽しんでた。お寺からの海の風景も佳いが、五〇〇米位離れた室津の最南端の「藻振の鼻」か

らの播磨灘の展望は一そう無類だ。あちこちのキヤムプから若い人達の快活な笑声が聞える。向うに見えるのは唐荷島だろうか。入江から入江に人を運ぶボンボン蒸気の音もかすかだ。附近の人の唯一の飲料水だという「法然上人具堀の井戸」の水は清冽。海岸にありながら些さかの塩味もない。人達は年中法然上人のお蔭を直接うけて生活しているというわけだ。

寺の書院から裏山あたりを眺めると、畳々と石垣が疊れた跡がある。あれは神原氏の出城の跡だと聞かされる。その下を相生行の



(浄運寺門前にて、右が筆者)

バスが走っている。あのあたりを中心に藻振の鼻にかけて室津の梅林として名高い。冬中雪をみない暖かい室津に、再び二月・三月の交に訪れてみたい遊志にそえられる。

法然上人霊場第三番室津浄運寺廿五霊場の殆んどは山を背景にあるが、それも京を中心の、ここだけが海の景観の中にある。私は自分の歩いた法然上人ゆかりの霊場の中で、ここが、流石、瀬戸内海国立公園の名に背かず、一等の絶景の霊場だと感じた。海と霊場、これも浄運寺を特異にしている一つだ。

往復の路に、この近く網干には、盤珪禪師

の龍門寺がある。車の砂塵を沿びて土塀は白っぽくよごれているが、車から見る寺内の雰囲気は流石は禪刹だ。ひっそり、しかしどっしりと沈黙におさまっている。

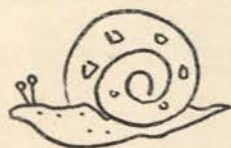
早朝に京都を発ってきたので、さきに高砂の十輪寺を訪れ、法然上人「宝瓶の御影」をとつくりと拝むこともできた。

「播磨法隆寺」の称さえある加古川在の万田山鶴林寺。おなじく聖徳太子ゆかりの、いかに、の名もなつかしい斑鳩寺。性空上人開基の書写山円教寺。播磨もまた古い仏法の国だ。それらを点々といろどる浄土教信仰の古刹法然上人ゆかりの十輪寺。室津浄運寺。播磨は、それ故に、さらに巡礼の想いをかきたるものがある。

浄運寺を創めたのは、あの播磨の僧寂房であることも忘れられない。

(大阪工業大学教授・黒谷西住院住職)

金光坊と阿波之助



中 川 大 仙

何われ、阿波之助は愚かなお弟子であつたと伺われます。

二

法然上人のお弟子が、二百人以上も居られたと伝えられている。お弟子の親盛法師が、師の上人に御往生の後、どなたに聞いたらよろしうございますかとお尋ね申上た時、上人は聖光坊と金光坊を推挙して居られる。又聖光坊に、弥陀の平等大悲に救われることについて、源空が唱うる念仏も、阿波之助が唱うる念仏も差別なく救われるのであると示された。金光坊は学僧を代表するほどのお弟子と

青森県五所川原市飯詰和田喜八郎氏は十年前、附近の山から発掘して秘蔵して居られるものの中、古文書もあり、金光坊について未知のことが古文書によりて知られてきました。同地の大泉寺住職開米智鑑、浄円寺住職佐藤堅瑞両師が和田氏の協力を得、研究整理し其一部を既に発表して居られる。私も同地に数回行き、和田氏と親交あり貴重な資料を拝見して居ります。去る九月五日大泉寺滞在中和田氏は阿波之助の記録を持参せられ、開米、佐藤両師と共に始めて拝見した。之は後に申

上る。

三

金光坊は、久寿二年（一一五五）九州石垣（福岡県浮羽郡水繩村）に生れ、仁安三年（一一六七）十三才の時比叡山恵光坊円輔について出家し爾来二十年研究修行に精進し、文治二年（一一八六）僧都に補せられ、石垣の勅願所観音寺住職に任ぜられた。徒弟の教養、大衆の教化、寺門の経営に努められたこと十年、建久七年（一一九六）観音寺境内の詐訟のため鎌倉に出頭された。当時鎌倉に法然上人弟子安楽坊が師命を受けて布教中であつた。金光坊は安楽坊に会い、人生の一大事は信仰にあり詐訟なんか無だな日暮しをしてはならぬと教えられ、詐訟を止めて法然上人を尋ねお弟子となられた。上人六十四才金光坊四十二才の時である。天台の学僧であつた金光坊は常随五年よく浄土の奥義を研究し、御相伝を受け専修念仏を喜ばれた。正治元年（一一九九）から法然上人の弟子達は師命を奉じて各地の伝道に越かれた。

四

正治二年上人六十八才金光坊四十六才の時

金光坊は師命を受け東北の伝道に赴かれた。東北の伝道十八年全く荆の中をあるかれた。津軽の旅は殊に苦辛せられた。村の人達は、

六尺三寸四十貫

人より三倍力もて

人より三倍かしこくて

阿呆じゃなかるかものもらい

朝から晩まで南無阿弥陀仏

金光坊を見ると、うたうのであった。又道で説法していると、子供達は石や棒切を投げつけふざけなどして邪魔をした。忍恥非恥と書いて自ら慰め、いかなる苦難も仏のお導きと頂き、いよいよ伝道熱を加えられた。

当時行丘附近の梵珠山に修験念仏宗の本山があった。その民衆教化の一例を見ると、

大泉院民治条例（取意）

一、常に三宝を敬拝せよ

二、人間は皆平等である

三、共同の安楽を心得よ

四、田畑は親の如く子の如くせよ

五、山林は防害の神とせよ

六、移転病者は防病舎にはいれ

七、子無き老人親無き子養入院にはいれ

八、九才から学習院で諸の学を受けよ
九、罪人は追罰、遠島の罪果を受けよ

十、業務の区別で争うな一心同体で行へ

以上のように本山は社会的に相当の指導力があった。金光坊は其本山に乗りこんで浄土教を説いた。議論が中々尽きない。彼等は、

金光坊を外道扱にして獄に入れた。獄中の生活は布教の自由は許されない。自行を専に静に念仏を唱えて時を待つて居られた。一年にして許され出獄すると再び本山に上り勇氣百倍、仏の冥護を信じ、修験念仏宗の非を責め

浄土教の真髓を説き激論数句に及ぶ。遂に本山は浄土に販入した。金光坊は仏の助力なりと合掌せられた。行丘馬捨盛にそまつなねぐらを定め、伝道中京都からの使者により、師の入滅を知り、一枚起請文般若贊等の遺品を頂き供養の法要を修し、悲しみの中にも念仏を勧めて居られた。日頃の疲労とこの悲報をきいて、重い病の床につかれた。

わたしが死んでも南無阿弥陀仏と唱うる声の中に金光坊はいつまでも生きています。と集る人々に念仏を勧め、念仏を唱えながら眠るが如く大往生なさいました。

建保五年（一二二七）三月二十五日六十三才

青森県南郡浪岡村北中野 西光院

に御墓あり、御影堂に御木像を安置す。

東奥念仏最初道場及御影堂の御染筆と

流れては千年にちかき吉水の

すめるを見るにさしくまれつつ

の御歌は、明治十三年行誠上人が西光院御親教の時に上げられたものである。金光坊は東北仏教の始祖と仰がれている。

五

前述の阿波之助の記録二通あり、一通は阿波之助自筆の懺悔文で（取意）

私は人と生れて、禽獣にも劣る行をしてきました。法然上人から念仏の教をきいて、暗をのがれ明を仰ぐ心になり、三宝に深く皈依し奉り、灰を飲んで胃を洗い、心から懺悔致します。大慈大悲阿弥陀仏お助け下さい。これから再び悪いことはしないように致します。唯一向に念仏を唱えます。証のために念珠を改め、之を師法然導師に捧げ奉ります。

総州西浜之住阿波之助 花押

仏教ものしり帖

珠数

念珠即ち「おもいのたま」ともい、珠の数は普通一〇八である。これは人間が持っている煩悩の数によつたものである。ちなみにのおみそかに鳴らす除夜の鐘も一〇八打つが、これも一〇八の煩悩を打ち出して清浄の身心になることを意味する。

浄土宗では、法然上人の弟子の阿波介が考案した二連珠数(二つ輪)が正式である。

一つの輪には三十六、他の一つの輪には三十の珠があり、三十の方の輪を、指でお念仏一つ唱える毎に一つづつ繰り、一まわりすると、三十六の輪を一つくる。こうして、三十六珠の輪が一まわりすると、さがっている房についている十個の小さい房珠を一つ上げ、それが全部上がると、もう一方の房のやや大きい珠を一つ上げる。これで一万遍になる。大きい房珠は六つあるから、これを全部あげると、六万遍の念仏をとえたことになる。浄土宗では、珠数を念仏の数とりに用いている。

珠数は常に左の手首にかけ、常に念仏し、いつもみ仏と共にある自覚を強める。合掌の時には、合せた両方の親指に二つともにかけて、手前に垂らす。やたらにすり合わせることはいけない。

一通は奥州へ使した事、筆者不明(取意)

阿波之助は法のため何一つしてないから、金光坊えの使は私にさせて下さいと願って定めて貰いた。建保四年二月四日一枚起請文及数多の状を持って六月二十八日行丘馬捨盛に着いて、金光坊に会い泣いて一夜語り明した。八月三日阿波之助飯途中尊寺に詣で、腹痛に依て入寂合掌

六

千葉県市川市行徳町高谷了極寺は阿波之助の遺跡で、九月十五日、村松教区長、藤井千葉組長と同道参詣し、住職中谷智存師から伺った。阿波之助が水鏡の御影を護持して奥州に越く時、新兵衛がお伴をし、中尊寺入寂後新兵衛御影を奉持して飯えり、庵を建て御影を本尊として念仏を唱えていた。庵が了極寺となった水鏡の御影を礼拝して、勤伝八、勝法坊の画特徴ある尊い御影と拝みました。阿波之助画像陰陽師として気品高い阿波之助を始め拝みました。

新兵衛像 阿波之助の教化を受け奥州にお伴をした農夫の特信者である。

前記今回発見の古文書に経州西浜とあるの

はここであろうと話し合つた事です、高谷は涙であります。中谷師の御厚意を深く感謝して三人は飯えりました。

七

勤伝翼讃、秘伝抄等の記事が尚詳しく分ればと以上述べたが、之とて史家の研究を期待する所である。阿波之助は千葉県に生れ京に上り陰陽師となり、裕福な暮をするようになって肉欲にふけり善からぬ生活をした。法然上人の感化を受け素直な念仏信者となった。

今日の日課珠数を発明して師の上人から賞められた。上人御入滅後奥州へ越くについて、かねて心にかけていた水鏡の御影を頂き、御遺品を護持して、故郷高谷に立寄り、特信者新兵衛を伴い奥州に趣き金光坊に会い使命を果し互に涙の物語も多かったことであろう阿波之助懺悔の自筆の文も金光坊に見て頂いて共に念仏を励まれたことであろう。往生された所に岩手県平泉町天台中尊寺光堂の左側に周囲五尺四方三段の角石を積み土饅頭の上に六字名号を彫つた五寸厚味の石碑があり、左側の水盤に円光大師随從舍利塔阿波之助墓と刻んである。(昭和三十三年九月二十五日)

川上かわかみに流れる

万物流転の仏教の要諦は、川岸に立つて、

滔々と流れ去る水の姿を眺める時、実感として心にせまってくる。凡ゆるものが、すべて、水の流れにのつて、川下へ、川下へと流れて行く。一物といえども、みな、流れ来り、流れ去って行く。水の流れを、時の流れにかえ、浮き沈みするものを。わが身になぞらえれば、それはそのまま仏の教えになる。

今夏、小閑を得て、数日を塩原の溪流に臨んですごした。奇巖重疊、七つ岩の壮観。水はしぶきを上げて流れている。その水音は、寝についても、枕もとまでかすかな動きを伝えて来る。そうした一日、二日をすごして、ひととき、宿の窓辺に凭って、ちつと川をみた。滔々と音して流れる水の早さを見つめてみると、吸い込まれて行くような氣にさえなる。一瞬といえど、とどまることをせずに、

走り去り、馳け去って行く。そのように、変化極らない水流の中にあって、その水流のほげしさを真正面からうけて立ち、微動もせず

に水を二つに分けている岩。疊を敷いたら四、五疊を敷けそうな岩。金輪際動こうともせずに、静かに、そしてどっしりと居坐っている。そのめぐりを流れる水の軽捷さと、まったく対照的に、不動の姿をみせている岩。

動中静とはこのことかと、しみじみとその姿にみられた。そして、動かざるもの、変らざるものここにあり、曰く、それは「万物流転」ということを示す「真理」それであると思つた。

それはそれとして、たまたま、塩原の山峽に生れ、七十才を越すまで、この溪流と共に生きて来た古老の来訪を得たので、今、感じたばかりの実感をつげた。

「あの流れの中にある岩は、まったく微動もせず、泰然たるものですなあ」と。ところが、古老の答えていわく。

「いや、あの岩も、昔はもう少し川下かわもとにありましたよ」

その返事の奇矯さに、思わず問いかえした。「川下ですって。だって、それでは水流と反対じやありませんか」

すべてのものは、流れにのつて、走り下るくだと思つたからである。

「小さい石は流されます。しかし、あのくらい大きい石になると、川上かわかみに流れるんです。」

理由は簡単であつた。一定の大きさの岩になると、水流がぶつかる正面の川底が、水のいきおいでえぐれて、くぼみになって、ごろりと前へかたむくのである。それが何回か、くり返えされるうちに、自然、川上に向つて、水流とは逆に移動して行くのである。

水流にのつて、川下に去ることはいとやすい。水流に抗して、かみにのぼって行く。ここにまた、仏の教えが如実に感じとられた。世俗に抗し、煩惱の奔流にさらつて、敢然と、上求菩提の道を進む、菩薩の姿をその岩にみたのである。



法然上人の言葉

— 第六回 —

増 谷 文 雄

「しければ、信をば一念にむまるととりて、行をは
一形ぎようにはげむべしとすすむる也。」

【登山状】

「登山状」は南都北嶺のいわゆる「八宗回心之訟訴」があ
った一二〇五年（元久二年）から程とおからぬころ、聖覚法
印の執筆によってなった。そのころ、法然はすでに七十歳
をこえておられた。もともと、あまり頑健ではなかった法
然は、もう筆をとるのもおつくうであつたにちがいない。
だが、周囲の状況は、ますます、彼の安逸を許さなくなっ
てきた。

彼はいくつかの起請を書いた。それで、旧仏教の人々は
いきどおりも、すこしは落ちついてきた。そこで今度は、
念仏のおしえにしたがう人々のなかに頭をもたげはじめ
ている邪説、越度にたいして、とくと心得かたを記しておか
ねばならぬ。「登山状」は、そのような状況のなかで生れ
た。

彼らの邪説、越度のなかには、「登山状」のことばのま
まに記してみると、

「悪業をおそるるは、弥陀の本願を信ぜざるなり。」
とするものがあり、また、

「数廻をかさぬるは、一念の往生をうたがふなり。」

とするものがあつた。

その前者は、いわゆる悪人正機の問題をめぐるものであつて、さきにも述べたように、この問題についての法然の発言が、慎重をきわめた理由がここに存していた。この「登山状」のなかでは、法然の、この問題に関する結語は「悪人をすてられずば、善人なんぞきらはん。つみをおそるは本願をうたがふと、この宗にはまたく存ぜざるところなり。」

となつてゐる。それを、この部分だけきりはなして、だから法然は悪人正機をとかなかつたとするのは、むしろ、適当な判断ではない。法然がここであつてゐるのは、悪業をおそるは本願を信じないからだという、おそろしい越度の見解へのいましめである。涙さんぜんとしてわが罪業ふかきをなげく者こそが、弥陀の正客であるというこの宗の立前は、それによつて少しも歪められてゐる訳ではないのである。

そして、その後者は、いわゆる一念義の問題に関するものであつた。五逆十惡の衆生といえども、一念十念によつて彼の國に往生するというのが、經典のいうところである。しかるところを、数おおく念仏をとなえるのは、その旨をうたがう者であるという。その考え方は、一応、論理

になつてゐるようであるが、実は、危険な飛躍をふくんでゐるのである。それにたいして、法然は、善導の釈の言葉に

「行住坐臥、時節の久近を問はず、念々に捨てざるもの、これを正定の業と名づく。かの仏願に順ずるが故に」とある一句などを引いて、まことの念仏者のありようは、その信において、一念十念をもつてよく往生できるのだと信じてうたがふことなく、その行においては、一生をかけて念仏の功をつむべきである、と教えた。それが、この文頭にかかげた一節なのである。

この一節について、私は、法然の考え方が、いかに実践的であるかを痛感する。という意味は、いつの場合にも、この上人は、論理のすえにはしらず、じつと、人間のうごきを見つめてゐるということである。

悪人こそ正機であるという、では、悪をおそるべきでないという。それは、論理のすえにはしつた考え方である。言葉だけのうえでは、それで論理が通つてゐるかも知れない。だが、悪をおそれぬ人間のうごきを、じつと見つめるとき、それが、どうして、弥陀の悲願にあたいする人間であり得ようか。弥陀の正客たるに値する人間は、もつと、デリケートな人間のうごきをもつてゐる筈である。悪

をおそれぬどころか。悪をおそれおののく人であらねばならない。悪をおそれおののきつつも、宿業のまよおすところ、つい、悪業をかさねてきた。その悪業のうえに、彼はさんぜんとして涙をそそぐ。このままでは、地獄ゆきにきまっていると、おそれおののかずにはおれない。そのような人間のうえにこそ、弥陀の誓願はふしぎなはたらきを展開するのである。

一念十念にても足るという。では、それ以上の念仏をかさねるものは、一念の往生をうたがうものであるという。それもまた、論理のすえに走って、じっと人間の心のうごきを見つめることを忘れたものである。たとい、言葉のうへでは、それで辻褄があうとしても、人間の微妙な心のうごきは、そんなものではあるまい。もしも、一念よく往生すとして、ただの一念だけで終ったものが、はたして、よく本願を信じつづけることができるであらうか。もしも、ほんとうに弥陀の本願を信じていたならば、あとからあとかと、口をついて念仏がでてくる筈である。親鸞が「真実信心、必具称名」といったのは、そのことである。だが、もっと本当のことをいうと、その信心もまた、ひとりて成るものではない。念仏をかさねるにしたがって、信心もまたしだいに堅きを加えてくる。

その点において、私は、法然のいうところの「念仏為先」(念仏をさきとなす)という考え方と、親鸞のいうところの「信心為本」(信心をもととなす)と考え方を、たいへん興味おおく思うのである。後世の教学をあげつらう人々の間においては、法然の立場は「念仏為本」であり、親鸞の立場は「信心為本」であって、この二人の立場が、相異なり、相対立しているもののごとくに考えられている。だが、よくよく調べ、よくよく考えて見ると、この二つの考え方を、相対立するものとするのは、いささか浅慮のいたすところではないかと思う。

まず、はっきりとすべきことは、法然の立場をいいあらわす言葉が「念仏為先」なのか、それとも、「念仏為本」であるかという点である。それについて、私の所見は、それは「念仏為先」であって、「念仏為本」ではないと思う。現に盧山寺に蔵せられる、「選択本願念仏集」は、それが最初の草稿本であると考えられるが、その稿本は、「選択本願念仏集」の題字と「南無阿弥陀仏 往生之業、念仏為先」の註とが、法然の真筆であって、以下の本文は、安楽房、真観房などをして筆を執らせたものである。その法然の真筆に、「往生之業、念仏為先」とあるからには、法然の立場が「念仏為先」であったことは、疑う余地がな

いであろう。しかるに、いわゆる広本「選択集」なるものがあり、そこでは「往生ノ業ニハ念仏ヲ本トス」とある。だが、それは恐らく、「選択集」執筆の門人のたれかが、初心の人々のために、いささか名目を加えたものであらうと考えられている。

「念仏為本」という言葉は、すでに恵心の「往生要集」に見えている。おなじく恵心の「妙行業記」には「念仏為先」とあることも、法然は知っていた。その二つの中から、彼がいまここに、「念仏為本」ではなくて、「念仏為先」をとりあげているのは、まったく理由のないことではなからう。その理由というのは他でもない。ここでもまた、法然は、じっと人間の心の微妙なうごきを見つめて、この「念仏為先」の句をとりあげているのである。

源智の「選択要決」は、かの「選択集」にたいする十難をあげて、それを一々に論駁している。その第六難には、「この集はしばらく起行の分際を明らかにして、いまだ安心の法門を述せず」

と批判するものがあつたと記している。それに対して、源智の論駁は、かの三心の説明こそが安心の法門であつて、この難はあたらずというものであつた。だが、この「選択集」にかぎらず、法然のおしえ方には、やはり一つ

の傾向がみられる。それは、起行の分際をかたることに傾向して、安心の法門を説くことが、ややすくないように見受けられる。この信仰の道の構造をまず語るのではなくて、いかにしてその道に入るか。それが、法然のもつとも意をもちいたところである。

彼は、人師として立った。この道の導師として人々を引導しなければならなかった。その立場から当然でてくるのは、そのような導き方であつた筈である。この道の構造を、じっとわが心のなかで思いめぐらすのではなくし、いかにすれば、人々はしぜんこの道の深みにすすむことができるか。それには、とにもかくにも、念仏にはげむことが第一である。「念仏為先」という考え方には、そのような実踐、起行への関心が中心となつてゐるにちがいない。

それに対して、「信心為本」という考え方のなかには、この道の構造にたいする関心が、よりつよく働いているように思われる。「御伝鈔」（親鸞の伝記）によると、法然在世のころ、行の座と信の座をもうけて、法然はいずれに坐すかを見てゐると、信の座をえらんだという。それは、そのままには信ぜられないとしても、この道の基底をなすものが信であることは、誰もこれを否定することはできない。だが、「信心為本」という言葉は、すくなくとも、親

鸞のものではない。それがはじめて見えているは、本願寺第三世、覚如の子、存覚（一二九〇—一三七三）の「六要鈔」においてであり、それがさかんに主張されたのは、蓮如以後のことである。親鸞においては、「末燈抄」第一一書に見えるように、

「信の一念、行の一念、ふたつなれども、信をはなれたる行もなし、行の一念をはなれたる信の一念もなし。」であり、また同じく第一二書にも、

「弥陀の本願とまふすは、名号をとなへんものをば、極楽にむかへんと、ちかはせたまひたるを、ふかく信してとなふるが、めでたきことにも候なり。信心ありとも、名号をとなへざらんには詮なく候。一向名号を、となふとも、信心あさくは、往生しがたく候」

とあるように、念仏と信心とは、相即の一枚たるべきものであって、いずれが本であるかと、相対立して考えらるべきものではなかったと思われる。そして、この最後の一節は、最初にあげた法然の一節と、はなはだ相似たる表現であることに注意したいのである。

完

（東京外国語大学教授）

会員各位にお願い

一、会費の変更

- 1 明年正月号より会費を年額金六百円に改正させていただきます。但し送料不要です。
- 2 一部の定価は金五十円で、送料四円です。
- 3 本誌の紙面拡充、内容刷新の為右御諒承いただきたく存じます。

尚、正月号は増頁いたし十二月中旬に発行の予定です。

二、支部を結成して下さい

- 1 会員五名以上で支部をご結成下さい。
- 2 支部には、支部拡張用として、お申込次第無料で見本「浄土」をお送りします。
- 3 二十名以上の支部には、毎月浄土を一冊贈呈します。

法然上人鑽仰会

浄土歌壇

片野喜久代送



天

仙 台 吉田 信吉

ゆかをひき机整ふ音のする「歎異抄」聴かせむと死囚の為に

囚室の窓が限れる朝廷に青き木肌のねむの大木

すみて啼く庭の虫の音ひびき来てこもれる独房のややにぎやかに小鳥啼くさ庭は春の陽にみちてわが終焉の日を思はする

評 異常な環境にあるらしい人のみじんも嘘や甘さのないまことと声をきく思ひがいたします。ピンと張り切った弦の物にふれて鳴り出た感じで心を打たれました。

地

静 岡 沢田 岳潤

夕闇のせまれる庭の一隅にほの白く咲くはまゆふの花

評 常識化された題材ながら、おだやかに清らかな調子をとります。

人

鹿 児 島 長崎 恒子

子の便り新聞配りに慣れたりと水担ふわざに母も慣れたり

評 離れて働く母子の真面目に生きる生活ぶりが明るく伝へられています。

東 京 久地東真敬

かかる日もつひに来りぬ癒えし子が手をふりて待つ小田原の駅

小田原 中里 史子

もの云ひのやさしくなれる嫁と居て秋日の縁に爪を切るかな

東 京 二宮 綾子

田んぼ道お地藏さまに葉をしきておはぎ参らす野の人のわざ

松 江 渡辺 絳子

ことごとく花のながから集め来て枕つくらん秋風の中

青 森 向井 きつ

一枚のカードと見れど温かき人の心を葉書ははこぶ

藤 沢 熊坂 満

くはへ行きしパイプと林檎の交換の話すすまぬ猿と人間

東 京 川辺 つぎ

千ばつのほこりに我れは黒くなりみ供養のため厨に仕ふ

東 京 小宮 みち

久調を叙して坐れば秋の家きよく塵なしさるすべり咲く

東 京 葛岡 利子

勤評の心異なりわが背とも遂に語らぬいく日か過ぐ

川 内 市 児島とき子

子を見ては我れの鏡と思はれて心しづかに化粧するなり

鹿 児 島 串岡 君江

化粧せしこともなくして逝きし伯母うすく化粧し紅さしてやる

岡 山 岸部かずゑ

木犀の香のただよへる家ゆけばもの煮る人の明るき声す

東 京 山田 繁子

雨の日のつづけばカンナ褪せずやと子は傘持ちて庭下駄をはく

和歌山 中川 誠一

峠なりこも葛城峯つづき紀の川平野に雲往き来する

東 京 菊地 美夫

碓氷川流るる音に心よくうたたね醒めぬ初秋の宵

高 岡 山本 保子

喜びに唯よろこびにわが心涙こぼるる仏いだき

富 山 萩布 錦

いつの日かこのおくつきに住むわれと今日も歩まん一期一会と

東 京 平川 梅路

洋菓子も栗にも足らで胃袋は秋の甘譜を入れておさまる

静 岡 洗禮 隠人

このごろの世相の仲に端然と山寺守るは悲しからずや

福 岡 吉末 真竜

珠数を手に慈尊の御名を唱へつつ荒れ雷の夜の山道

林 法 靈 氏 の

『危機と信仰』を読んで

佐 藤 賢 順

仏教学の学者は多い。宗教を現象論的に研究して、東西の宗教について豊富な知識を持っている人も多い。しかし仏数の信仰を身にかけて、しかも現代的な豊かな教養でこれを含んで、その信仰によって雄々しく生きぬいている人は、現在では極めて少いのではないか。これは一見、奇異なことに思えるが、教と学とが分れてしまって、宗教がたんなる学問的研究の対象に落ちてしまった現在では、致し方ないことかもしれない。

また、唯物論の立場に立って社会革新運動に従事している人は多い。その大部分が唯物論者であるといってもよいであろう。しかし宗教の立場に立って、共産主義との間に嚴重な一線を劃して、人間性、主体性の価値を十分に認識して、それを生かそうとして社会運動に生涯を捧げている人もまた極めて少いのではないか。

ではないか。

林靈法氏の新著『危機と信仰』を読んでまず感じたことは、著者はこの極めて少い人の一人であるということである。氏は東海学園（名古屋）の園長で、戦後、新しい勇気と確信とを以て立ち上って、本当の日本の再生は宗教を根柢とした教育の道以外にはないと信じて、只今、教育に努力をささげている一人である。しかし著者が今まで歩いてきた道は必ずしも平坦ではなかった。氏は大学を出てから、仏教の信念を依り所としながらも、いろいろと思想遍路を続けた。仏教の信念による社会改革と人類愛とに異常な情熱を持って、同志とともに新興仏教青年同盟を組織して、解放運動に挺身したこともあった。そのため戦時中の弾圧を受けて、しばらくは苦難の道を歩いた。そうしたことが一層、著者の思

扉の御法語

ある人が上人にお尋ねしました。

「あしたにもゆふべにも、いとなむ事は名聞。昨日も今日もおもふ事は利養也。かやうの身にて申さん念仏は、いかゞ仏の御意にもかなひ候べきや」

これに対して上人が答えられたのが、扉の御法語です。これは十二個問答に出てくるもので、この問答集には、このような具体的な一見細かなような質問ばかりですが、実はどうにもならない、それだけ深刻な悩みばかりです。

念仏を申し往生を願う気持は真剣なのですが、しかし、反省してみると、名聞、利欲を願ひ、これを追及している日目の生活であることも事実です。そのために他人に迷惑をかけることもあるし、他人の損失をまねくこともあります。こんな生活をしながら、やはりアミダさまのご来迎を得たいのです。一体どうしたらよいのでしょうか。

つまらない質問のように思う人があるかも知れませんが、これ程普遍的な、誰でも悩む問題はあります。逆にこうした悩み苦しむ人こそ正直だといえましょう。上人はこうした質問に対して決して叱るう

想や信仰を深めて描きえないものにしたのである。

『危機と信仰』は随筆、書簡、小論文など十七篇を三部に整理編集して、第一部は体験談が多く、信仰と人生というような問題を広く扱っており、第二部は親しい人達への書簡、第三部は宗教と社会運動（特に共産主義）に関する著者の根本的な見解を纏めたもの四篇が収録されている。どの一篇を取って読んでもそれぞれに興味がある。溢れる情熱と暢達な文章とに引かれてつい終りまで読んでしまう。わたくしは毎晩、寝るときに、一篇二篇ずつを読んだが、いつもすがすがしい読後感を味った。

著者が法を求める態度は謙虚で寛大である。予め何か先入見で心の中を閉ざして、頑迷に他のことを拒けるというのではなく、ひろく心を開いて、精神の糧になるものは何なりとも摂取し吸収して消化してしまおうというのである。内村鑑三の信念からも深い感動を受け、ロマン・ローランの「ジャン・クリストフ」からも虚無と死を克服するものを学び取っている。こういう点が今までの偏狭な仏

教者と違ふところで、現代の多彩な思想で仏教の根本信条を表現し直しているのである。

現代の思想で仏教の信念を表現し直すといっても、それは仏教の信念を歪めるのではなくて、仏教信仰の核心を抱えているというべきであろう。例えば「わが本國は浄土なり」や「親の死を喜びうる人」などに説かれて往生浄土や不滅の法身について説いているところを挙げるならば、著者の仏教についての根本信念を窮うことができるであろう。この現実の身、現実の社会にこそ浄土は実現されるべきであって、この地上を無窮に浄化発展せしめてゆくところに信仰の働きがあると説かれている。

社会革新運動家としての著者の立場は「宗教は社会主義の敵か味方か」に最もよく示されていて、実践に従事する仏教徒の是非とも一読すべき論文である。

B六判 二八〇頁
定価 二五〇円
送料 三〇円

発行所 百華苑
京都市下京区堀川通花屋町

とはしません。淨麻尼珠は、ものを浄めようと願う者に対してすぐ垢を去り浄めてくれる宝珠です。人間の心の中は、種々な欲望のために濁っていることは事実ですが、宝珠の不思議な力が水を浄めると同様に、そんな凡夫でもお念仏によって往生ができます。

上人のお答えは、扉の御法語を更に続けてこう申されています。

「わが心をしづめ、このさばりをのぞきて、後念仏せよとはあらず。ただつねに念仏して、そのつみをば滅すべし、さればむかしより在家の人、おほく往生したるためしにくばくおほき。心のしづかならざらんにつけても、よくよく仏力をたのみ、もはら念仏すべし。」

凡夫の愚な質問に対して、上人は叱るどころか、勵まし、念々にお念仏することを勧めます。このお言葉によって多くの人は救われました。いや万人が万人とも持っている悩みであり、どうにもならぬ実態だけに、すべての人が上人によって救われたし、逆にこの御法語がなければ誰一人往生を信じ得なかったといつて過言ではありません。

上人の勧められたお念仏の道は、先ず以て素直な正直な、そして真剣な人の生活がなくてはいけません。そして「もはら念仏すべし」の御法語を有難く戴くところに、真の生活が生れてきます。

法然上人をめぐる人々 (完)

——鎮西の聖光上人と勢観房源智上人——



井川定慶

一、忘れることの難しさ

歌留多の鈴山名人と対談した時に「忘れることは六カ敷しいです」と云われる。事情を糾^{きつ}してみるとカルタ取の座について對抗している時には敵と味方のカルタを全部頭に入れてしまう。よみが進んで一枚二枚と取られたカルタ是れも敵味方の分を全部一々頭に銘記している。そして百枚のカルタが終って勝負がつき、サア次の勝負とな

る。其の時である。今まで頭にあった百枚のカルタをスツカリ綺麗に忘れ去ってしまった。今やまた新しくカルタの一つを頭に描くわけである。

選択本願念仏集の第一章に法然上人が「聖道門を捨て、浄土門に帰す」と宣言せられていた心境がそうであつたろう。十五才比叡山に登られた勢至丸の昔から西塔黒谷の報恩蔵に立籠って一切経を閲読せられての廿六年間、経論のスマズミまで頭に入れた秀才「智恵第一の法然房」であつたものが、承安五年の春に浄土門を開き

になるや其の刻苦精励の聖道門をスツキリ捨てて全く忘れたかの如くあつて始めて浄土門が輝いて来るのではあるまいか。

二、教学論法

法然上人の聖道門を捨ててしまったというのは痴呆症や健忘症の忘れ方ではなかった。次の浄土門へ専心する為めの捨て忘れであつた。されば、鎮西から遙々訪ねて来た油山の学頭聖光房弁長の学僧らしい問いに対しては三重の念仏の由来を説明して忽ちに同者聖光房を心服せしめるだけの蘊蓄は上人に尚おも持ちあはされていたのである。

また大原談義の席上では天台の頭真等の綺羅星の如く並ぶ学匠達に対し、仏教々学を条理をつくして説明し納得せしめ、遂に一同が法然上人を先登に仰いで念仏行道するまでに説きお世話というのは、流石は法然上人なるかなであつて、其の教学の底力の深さははかり知れないのである。

されば日蓮聖人でさえも法然上人を評し

「一切経を習ひ極め天台六十巻に渡り、八宗を兼学して一代聖教の大意を得たりとのしり、天下無双の靈者、山門第一の学匠なり云々（乃至）智慧日月の如く世間を照して肩を並ぶる人なし。名体は一天に充ちて善導にも越へ、曇鸞、道綽にも勝れたり。貴賤上下皆選択集を以て生身の明鏡なりと思ひ、道俗男女悉く法然房を以て生身の弥陀と仰ぐ」

まことに超弩級の讃辞ではあるまいか。普通一般に念仏門を誹謗する日蓮聖人と評されている其の人がかように法然上人をはめている処を見ても如何に法然上人が学者として超絶せられていたかは想像に余りがあるのである。

されば巨大なる梵鐘に巨大なる撞木をうちあてれば巨声を発する如く鎮西の聖光房の問いに対しての法然上人の御教示はまた実に偉大なものであったことであろう。而かも一器の水を一器に移すが如く余さず残さず浄土の法門を聖光房に伝えてしまはれ

たのである。かくて聖光房弁長は充分満足して九州に下り祖師上人に代って念仏教化に身を捧げられると同時に、異学異見の邪魔者に一般大衆がまどわされてはならないと著述にも心を配り鎮西宗要や徹選択集を書き上げ、別に心血を注いで末代念仏授手印をも作製して法然上人の念仏義を寸分違はず後世に残こし伝えることに専心せられたのである。

三、一枚起請文

法然上人に教えをうけた弟子にもいろいろあった。公家、武家、大道易者、強盜、遊女、海人、庶民という風に在俗にも雑多あったが出家僧にも学僧、道心者、説教僧等々各種各様であった。

勢親房源智は平家の公達の出身であっただけに源氏の盛んな鎌倉時代となつては肩身が狭かったものか法然上人の法衣の袖にかくれて忠実に常随するのみのお弟子の一人であり、上人も亦格別に目をかけ可愛がっていられたようである。

建暦二年の正月の初めから上人の病勢は

つりの、八十歳の老齢であるから御臨終が程近いかも知れぬと察せられた。常随給仕の源智は上人の枕もとに口を寄せ「後ち〳〵の爲めにお念仏のことを手短かに書き記るして私どもの常日頃の信条となるものを御示し下さい」と懇願するのであった。上人は早速御承諾になった。

筆硯と紙とをとりよせ重いお頭（かぶ）を上げられてお蒲団の上でサラサラとお書になったのが「唐土わが朝にもろもろの智者たちの沙汰し申さるる観念の念にもあらず（乃至）ただ一向に念仏すべし」と諭され、起誓の文をつけ加え建暦二年正月廿三日、源空と自署を認め更に、両手印を証契に捺してまな弟子源智に渡されたのが世にいう「一枚起請文」である。

上人の著述も御法語も数多く遺されて其の大概は漢和語灯録に多分に収まっていゐるが「一枚起請文」ほど簡潔で要領をえた御法語は類例もなく読んで有りがたいお言葉と拝せられる。この御法語が今に伝わるようになったのは全く常随給仕の源智の切なるおもひが原因であつて末代のわれ

われまでも非常に恩沢を蒙っている点で、源智を景仰せねばならない。

四、靈蹟の護持

弟子の法蓮房僧空が上人に「いづくこそ御遺蹟に」と伺ったところ上人は即坐に「念仏の声するところ皆予が遺蹟なり」と答えられ特定の場所を限られなかった。仰せの意味は御尤である。然し今となって元祖上人の御廟所や御教化の庵室のあとが定かに遺されている事は、単なる郷愁でなく末徒が追懐し乍ら自分どもの信仰をたかめる為に大いに役立つ大切な重要文化財の厳存である。その意味に於て源智が上人御往生のあとに於て埋葬された御廟所を護持し、年経て山僧の破壊を受けかけるや逸早く同志を喚びよせ難を通れる為めに改築して西山翠生野に移して茶毘に付し、更に其の靈骨を此の地に迎えて今の華頂山御廟所を築造し其の脇にお墓守りの堂を営み「知恩院」と名づけ自ら第二代となり桑原左衛門入道の造りおきし上人の嘗ての画像を本尊と定むる等、おもえば数ある弟子の中で

遺蹟保存に心をつくされたる所業は洵に適宜にして行届いた処置である。なる程源智は常隨給仕の弟子たる面目を發揮せられた

仏教ものしり帖

大黒天

梵語でマハーカラーといひ、真言宗の本尊大日如來の仮りの姿とされる。元來はインド教の中のシバ神という戦闘神であつたのが仏教の中にとり入れられて、前号に述べたダキニ天を降伏させるために大日如來が仮に姿をとつてあらわれたものとなつた。

しかし、一般に信じられている大黒天は福の神である。それは大黒天にはものを生み出す力があることに原因しており、日本では烏帽子狩衣をつけ、右手に小づちをとり、左手にふくろを背負つて米俵の上に坐っている。小づちは打での小づちといわれ何でもほしいものが出て来るといひ、仏教の如意宝珠にかたどつたものである。ふくろと米俵は諸人に施

というより他に表現の仕方はあるまい。

(知恩院教学部長)

す財宝が入っているとされる。

わが国では昔から大黒天と大國主命とが混同されて信ぜられているが、何故この二人が一人のように考えられるようになったかというところ、大國主命が多くの神々と共に八上媛のところに行く時、みんなの荷物を背負わされた姿が大黒天の袋を背負っているのと似ていたり、大國主命が鬼を助けるために薬を教えたり与えたりしたのと大黒天が施し物をするのが共通していた点などから、この二神を一人の神とするようになったといわれる。大黒天には鼠がつきものだが、これは大國主命がスサノオの尊のために危地に陥いられた時、鼠に教えられて助つたという伝説にもとづき、甲子の日が大黒天の縁日になったのもこのためである。家の中心の柱を大黒柱というのは、大黒天のような福々しい神がどつしりと家の中央に坐っていれば安全だからである。

会員だより

前略 平素の無音平に、毎度浄土御送りされて御礼致します。時に秋、台風一過涼しさ弥増の当地、沖の白浪や浪頭に立つ白鳥の蹴りも激しく、冬の海辺しと思わせます。

浄土の内容最近特に向上し嬉しく拝見し居ります。先生方の御努力ながら多謝し居ります。

ここ養老院収容者二〇四名の爲二十五名の従業員と共に努力し居ります。老人の一人一人が奇らしい過夫を持ち当院に老者を入れる家庭の様相も亦種々あり、教えられる事です。付風病院には医師看護婦、事務員百名居り、入院患者のベッドも二百あり殆んど満員、その中の大部分が医療保護者にて是又世の荒波にもまれ戦禍により再起不能に入つた人が多く福祉事業の必要性を充分感じます。近かく従業員の全部一丸として養老院と病院合計百二十五名の労働組合が結成され是又生活保障と親睦を目的の爲私が長となつて新発します。

誌代五〇円送金に加えて御報告まで。

昭和三十三年十月四日 合章

北海道根室 山田隆元

新規会員

県名	芳名
和歌山	尾上 義随
福井	中野 玄光
奈良	坊城 通泰
長崎	中野 全能
静岡	安 養院
"	光 照寺
"	稲村 文三
大阪	常 楽寺
島根	本田 行男
東京	池田 賢純
宮崎	日野 直
広島	中村 哲宗
神奈川	颯立 正戒
大分	黒木 善端
長崎	米子 猛
"	松添 増次

支部通信

茨城	専修寺(二十名)
代表者	村上 博了様
埼玉	円心寺(二十名)
茨城	常林寺(二十五名)
大阪	大光寺(二十名)
代表者	三枝樹正道様
広島	浄国寺(二十五名)
東京	伝通院(三十五名)
"	大河内隆弘様
"	西福寺(二十五名)
"	成田 良穂様
福井	善導寺(三十名)
"	大門 俊我様
東京	講安寺(二十五名)
"	池田 立基様
青森	青岩寺(七名)
東京	浄心寺(十名)
京都	家政学園(十二名)

「浄土」購読規定

一部 定価 金四十円

(送料 四円)

会費一万年

金四八〇円

(送料不要)

浄土

十二月号

昭和十年五月廿日

第三種郵便物認可

昭和三十三年十一月廿五日 印刷

昭和三十三年十二月一日 発行

定価 四十円

編集人

竹 中 信 常

発行人

佐 藤 密 雄

印刷人

神 谷 秀 雄

印刷所

神谷印刷株式会社

発行所

法然上人顕仰会

東京都品川区上大崎一ノ七八二
振替東京八二一七番

昭和十年五月廿日 第三種郵便物認可(毎月一回一日発行)
昭和十三年三月三十一日 昭和十三年三月三十一日発行

東京高等保育学校長
駒沢大学文学部講師

内山憲尙著

B 6判一六〇頁
予価 一八〇円
送料 三〇円

仏教保育二十章

— 図解・仏教保育の理論と実際 —

内山先生は東京高等保育学校、聖美幼稚園などの経営にあたり、多年、実際の仏教保育を通じて、指導理念をつかみ、それを実践されてきた方であります。本書の執筆は、六・七年前より計画され、長い間資料をあつめ想を練つた上、このほど脱稿をみたものであり、幼稚園、保育所が数においては龐大なものになつたにもかかわらず、適切な保育指導書を欠いている今日、まことに時宜をえたものと思ひます。

何卒、御一読をおねがい申し上げます。

(付録)

一、幼稚園関係法規

教育基本法、学校教育法抄、設置基準法
二、保育所関係法規
児童憲章、児童福祉法

東京都中央区京橋二の一(塩山ビル)

申込先

青山書院

振替東京九九三〇三番

正しい信仰を得る為の

新興宗教の批判と分析

大正大学教授 竹中信常著

新興宗教

申込先

東京都港区芝公園十九号地の一
浄土宗教化団中央本部

新書版 八九頁
頒価 五十円
送料 八円

本宗檀家一軒一冊

須藤隆仙著 (トラクト版)
ガイド・ブック (二四頁)

浄土宗

申込先

法然上人七百五十年御忌記念出版
浄土宗教学研究会発行
北海道森町 森称名寺

振替 函館 一〇一九番
頒価 実費 三十円
五十部以上一部につき二十五円
実費